

## 詩歌・小説の中のはきもの (第35回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

353 フィンランドのロバニエミという町は、北極圏の線から10キロ北にある。冬は零下25度。・・・クリスマス・ツリーの下でくつろぐ両親と兄弟。靴下か素足でいる。床は木を張ってあり、ところどころ敷物をしいてある。

学校ではどうかと思ったら、夏も冬も、教室内では靴下でいる。冬になると、廊下には、それぞれの厚い防寒着をかけた下に、とても小学生用とは思えない、大きな厚手のブーツがぬいである。

横山貞子

★『古い、時のかさなり』から。室内で靴を脱ぐ習慣のあるのはひとり日本人に限らない。気候が温暖なところに住む人は、裸足でよかったし、履物を履いたとしても素足でよかったのにそうはしなかった。ステータスや権威を示す必要から履物を履いたり、内履き（靴下や襪・足袋）を履いたりしたからである。一国一民族の風俗だけでなく、世界中の風俗史に占める履物を比較研究しなければ、履物の本質的なものは把握できない。

354 雪が10尺も15尺も積もっている山を歩くには、かんじきなんぞ覆いてもなお、雪に足を取られてしまいます。そこで長年の知恵と経験で作られたのが雛わらじでありまして、これをかんじきの底、ちょうど土踏まずのちよいと上あたりに噛ませますと、靴底の摩擦がぐんと増えまして、柔らかい雪の上でもさほど足を取られずに済むという、雪国にはまことに便利なものでありました。

藤谷 治

★『いなかのせんきょ』から。この「雛わらじ」が金糸銀糸で模様や絵をつけられてお土産物になり、ついには、村長が24億円もかけて「雛わらじ記念館」を建設するとストーリーは進むのですが、伝統工芸品というのは、大抵このように生活の実態から離れて行くもののようです。しかし火吹竹や蓑のように全く姿を消してしまうよりは、美しく飾り立てられたり、かわいいくらい小さくされても、その形を残される方がいいのかも知れません。

355 少年はありったけの衣服をまとう。足に木靴を履く。これでロンコーレまでの7キロを歩むのだ。寒さから身を守るにはとうてい十分とはいいがたい。贅沢はいえない。気候のいい夏には、靴はすり減るのを防ぐために、裸足になることある。それでも冬よりはるかに楽だ。平原の冬は暗く、長く、厳しい。

加藤治子

★『黄金の翼＝ジュセッペ・ヴェルディ』から。教会にオルガンを弾きに行くときの様子である。後年歌劇作曲家として名をなした彼は、靴屋の徒弟だったことがあるのだが、多くの伝記にはその記述がない。ヴェルディは、自身の幼少期について触れたがらなかった。最近出た伝記では、唯一『ヴェルディ アルド・オーベルドフェル著（松本康子訳）』の中に、「父親は、ブッセートの靴直しを職とするプニャッタの家庭に息子を下宿させる。賄い付きの下宿費1日30チェンテージ（1リラの100分の1）。決して満足には食べられなかったが、貧困に育った者には有り余るほどであった」とい

う記述がある。

356 冬の雨下駄箱にある父の下駄

辻 征夫

(うん、死んだ父の 下駄なんだよ  
履き方に癖があって へんな風にへるもの  
だから借りて歩くと頭にひびいた 先日  
見つけて 履いてみたらやっぱりひびいた  
おこられているみたいで まいったね)

★作者の自句自解である。似たような情景を詠んだ短歌に、「縁の下奥ふかく亡父の下駄あり右片高に歯の減りている 真鍋三和子」というのがある。下駄の歯の減り様に故人の懐かしい個性が残されている。その下駄をただ眺めているのではなく、“馬には乗って見よ、人には就いて見よ”とばかりに、その下駄を履いてみたら怒られたようだったというのが面白い。

357 本当に寒い日には、ブレアはママのブルージーとディグナおばちゃんがクリスマスに買ってくれた、白いウールのジャンプスーツを着る。お日さまをあびてかがやいている雪と同じように真っ白いジャンプスーツだ。模造毛皮の裏がついているゴム製のオーバーブーツの中に、足首まである革の靴をはき、その中にウールのソックスをはいている。

ヴァージニア・ハミルトン

★『雪あらしの町 (掛川恭子訳)』から。ハミルトンは、現代アメリカを代表する児童文学作家である。外国の児童文学は子供の人物描写に服装だけでなく靴まで記述する。日本の児童書にはなかなか靴の描写が出てこない。書き手である大人にとって、靴がまだ生活の一部になっていないのか、子供の性格、好みを表現するには適さないアイテムになっているのか、どちらかだろう。

358 宿の大きないろりの上には一間四方もあるあま棚(いろりの上の棚)がさがっていて、工女はあかあかと燃えるホダ火に冷え切った身をあたため、脚絆やワラ

ジを乾かした。宿といってもただい通りに火をたいて、その周りに下掛けのような薄いふとんが敷いてあるだけの雑魚寝だった。

・・・明治のころに工場主も素ワラジに法被、頭に鉢巻といういでたちで、工女より早く起きて、水車故障が起きると凍った天竜川にとび込んで修理し、釜に火をたき、まっ黒になって煙突掃除もした。

山本茂実

★『ああ野麦峠 ある製糸工女哀史』から。草履や草鞋を乾かすのは長持ちさせるためと、ぐちゃっとした気持ちの悪さを避けるためだった。下駄を焚火の火で温めて履いたりもした。直ぐに冷えてしまうのだが、シモヤケの指にはそのいつかの温かさがたまらない快感だった。足袋をつけて下駄を履くと鼻緒とこすれて足袋が傷む、だから素足のことが多かった。「素ワラジ」などという言葉があったころの日本は本当に貧しい国だった。

359 シャツは白地のリンネルで胸と手くびりにレースの飾りがついていた。ちゃんとした服装には赤地の絹のストッキングをはいて、上がひろがったブーツをはくのが普通だった。よく晴れた日には短靴もはくが、自宅にいるときは軟らかいなめし皮のスリッパをはく。

W・E・ウッドワード

★『アメリカ人はどう生きてきたか (中西秀男訳)』から。1713年(正徳3年)のバージニア州の農園主ヘンリー・ランダルスタイルである。ここでは省いたが服やその服についているボタン、チョッキ、被っていたカツラまで記録している。私は好んで伝記を読むが、最近、日本人が書いた伝記にはその人の着ていた衣裳についての記述がほとんど見られない。ましてや靴にいたっては寥々たるものである。「ボロは着てても心は錦」的な服飾観はほどほどにして、服も靴もその人の自我の延長線上にあるものとしてきちんと後世に伝えるべきだろう。

360 只一日の願ひ二つのみ。今宵よき宿  
借らん、草鞋のわが足によろしきを求め  
んとばかり、いさゝかの思ひなり。

松尾芭蕉

★『笈の小文』から。「寛歩駕に代えば、  
晩食肉より甘し」、駕籠に乗る代わりにゆっ  
たりと歩けば食事がうまいという有名な言  
葉に次ぐ、芭蕉の旅行信条。いい寝床、そ  
れにいい履物があればよしとする。靴屋の  
私に言わせてもらえば、宿屋は雨露がしの  
げ、腹がくちくなるだけの食べ物を提供し  
てくれれば、別に選り好みはしなくてもよ  
い。だが、履物は履けばいいという訳に行  
かない。芭蕉の心境で浮雲のごとくさすら  
う旅は理想だろう。

361 フートは文字通り足の長さで発した  
単位で、起源はキュービットとともに古  
いが、今もなお使われている。「フート  
foot」は英語で複数の場合はフィートで  
あるが、古代からそれぞれの民族や国家  
で足を意味する言葉で呼ばれてきた。  
キュービットが工作用に発生したのに対  
して、フートは土地用として生じたもの  
と考えられる。東洋ではこれに相当する  
単位は歩幅に始まる二歩の長さの〔歩〕  
である。

小泉袈裟勝

★『単位もの知り帳』から。キュービット  
(cubit)は、古代オリエントの基本的長さ  
の単位、肘から中指の先までの約500ミ  
リの長さ。日本の尺は人の手の幅、寸は親指  
の幅。中国の「歩」は歩幅だから東洋には  
足の長さを用いた単位はないという。水平  
距離といったら、先ず足と来そうなものな  
のに、不自然なことである。

362 晩ご飯食べて風呂に入って、その後、  
こんどは夜なべ仕事が始まるんだ。女は  
針仕事。男は農作業のときに履くもの、  
草鞋とか「アシナカ」って草履だな。草  
履もつくったんだね。これは売るんでね  
え。家族が使うものをつくるんだ。今の  
ように履きものがねえんだもん。みな、  
冬だって夏だって、自分の家をつくった

ものを履いて歩いた。

大場善蔵

★『大黒柱に刻まれた家族の百年 塩野米  
松著』から。野良仕事は裸足だったと明治  
43年生まれの大場善蔵さんは言う。こんな話を  
聴かされると、投げ出した両足の親指に縄  
をかけ、よく叩いた稲藁を2、3本ずつ通  
して行ったこと。編みはじめと、最後のと  
ころにボロ布を入れて緇うと、見栄えもよ  
く丈夫なものになったこと、などをつい  
つ思い出してしまふ。

363 彼女はだしぬけにベッドの上で身を  
よじると、床の靴をつまみあげて男のよ  
うに腕をぐいと引き、部屋の片隅に勢い  
よく投げつけた。あの朝“2分間憎悪”  
の最中に、ゴールドスタインの肖像めが  
けて辞書を投げつけたのを見掛けたのと  
同じような動作であった。

「何がいたのかね？」と彼は驚いて聞  
いた。

「ネズミよ。・・・」

ジョージ・オーウェル

★『一九八四年（新庄哲夫訳）』から。外  
国の小説には室内で靴を相手に投げつける  
シーンがよく登場する。日本人はまずそん  
なことはしない。第一玄関で靴を脱いでし  
まうのだからそんなことはできない。また  
怒った女性が靴を脱いで相手に殴りかかる  
のも珍しくない。日本でも下足で人の頭を  
打つのはけしからんことではあるが、外国  
におけるこの行為は積極的な侮辱の意志を  
含んでいる。いずれにもせよ、投げれば靴  
にキズがつくから、こんな西洋かぶれの真  
似はお止めになった方が賢明である。

364 何不足ない晴れやかな明るい家庭や  
静かな物思はしげな書齋をあとになんの  
ためにこんな旅だと人は言ふのか。しか  
し、此の谷、此の雨、此のきりぎりし、鉦  
靴に堅く険阻な此の山みちと無人の世  
界、かういふ物こそ私は憧れ求めて来た  
のだ。

尾崎喜八

★『単独行』の一節。この詩は「非情の美にかこまれた孤独の境地で／おのが真相と対決するきびしくも澄んだ体験だ。」で結ばれる。私にも好んで一人で山歩きをした時期はあるが、わがままだから、好き勝手に過ごせる「自由」を求めたもので、山の静かさの中でボンヤリとしていた。それに登山靴を枕にして露営を3日も続けていると、登山靴がいつの間にか心強い友人になってしまい、孤独だなどと一度も思ったことがなかった。

365 昭和十九年十一月三十日  
寒椿靴盗られしを知らず吾れ  
上海の靴盗まれぬ冬の雨  
冬の雨靴盗まれて楽屋入り  
徳川夢声

★『夢声戦争日記』から。この日で3回目の盗難被害だったという。3回とも外地製品で1回目のものは浅草方面ロケで盗まれた。上海で買った11円の中古。2回目は大映の多摩川撮影所で。昭南、今のシンガポールで46円で買ったドイツボックス。そして3回目は上海の人から土産にもらった靴で500円はするものだった。その当時の川柳に「盗られてもよい下駄を脱ぐ潮干狩り織部天皇」という句がある。

